

放射光実験施設（PF）が正式な組織として再出発してから5年、新生放射光実験施設の2代目実験施設長に就任いたしました。施設長として「放射光科学の発展とPFの次期計画の実現」に向けて全力を尽くしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。私は博士課程を修了してからすぐにPFに採用され、最初は構造生物ビームラインで研究と装置開発をやっていましたが、いつの間にかビームライン開発にメインで携わるようになり、他のビームライン建設にも参加するようになりました。10年ほど前からは先端基盤安全グループのグループリーダーを任じられ、PFの再出発からは、基盤技術部門の部門長としてPF全体の基盤技術開発を担当していました。このように現場叩き上げの人間ですので、現場をよく知っているという強みがあると思っています。反面、施設運営に関しては初め手探りになると思いますが、関係各所とよく相談しながら、現状の境界条件の中で学術基盤施設としてのPFの存在感を高め、放射光科学やPFの明るい未来に繋がるよう責任感を持ってあたりたいと思います。

PFの施設運営にあたっては、これまで小杉前物構研所長、船守前実験施設長（現物構研所長）が進めてきた、組織基盤を強固にするための体制強化、学術基盤施設の役割の明確化および次期計画検討基盤の確立などの取り組みを活かし、基本的な方針は継続しつつ、施設や機構内外の連携をさらに強化し、目的を達成するために施設としてプレずに取り組みを進めていきたいと考えています。また、今回は船守前施設長が物構研で初めて所内から所長に選出され、このような継続的な取り組みを進め易い状況にあると思いますので、物構研からの協力も得て、施設内の運営や、機構内外との連携の強化を図りたいと考えています。私も施設長として、現場をよく知っているという強みを活かし、放射光実験施設、放射光科学第一・第二研究系、加速器第六研究系の一体となった活動、加速器研究施設、共通基盤研究施設、管理局（機構事務本部）及び素粒子原子核研究所との機構内連携、および放射光コミュニティとの連携を強化することを重視して活動したいと考えています。また、KEKの機構長や理事も今年度刷新されましたので、新しい機構執行部との連携関係の構築は喫緊の課題だと思っています。こちらも関係各所と相談しながら、早期に連携関係が構築できるよう対応を進めます。

施設運営においては、運転時間の確保は重要な課題です。PFプロジェクトは基幹経費化されたものの、このところの電気代の高騰や施設工事の関係で、運転スケジュールの決定の遅れや最低運転時間が確保できないなど、ユーザーの皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。しかし2024年度に関しては、機構からの支援を受け、少なくとも年間の運転時間（PF3600時間、PF-AR2400時間）を確保できることになり、大きな施設工事も少ないので、久しぶりに

スケジュール通りの運転ができそうなのは良いニュースです。今後も運転スケジュールの定常化に向けて努力したいと思います。一方、老朽化対策や基盤整備、放射光科学やPFの将来のための開発への投資も重要です。運転と整備をバランスよく実施しつつ、将来に向けたR&Dを並行して進めるのは大変難しいことですが、機構や物構研からの協力や外部資金の獲得による予算確保に加えて、必要な装置や設備などについて将来的な転用を考慮に入れる設計をするなど工夫して、開発や整備も着実に進められるようにしたいと考えています。

次期計画に関しても、これまで関係各所やユーザーの皆さまと進めてきた、新放射光源施設の構想を着実に煮詰めて具体的な建設提案を完成させるとともに、大学共同利用の使命や幅広いシーズ探索研究の重要性、それらを進める上でテーマとして掲げている「サイエンスの深化・融合・創成」の説明を強化し、機構内外での理解が広がるように活動したいと考えています。これまで機構内ではフォトンファクトリー計画推進委員会を設置、検討を重ね、ユーザーの皆さまとも2回にわたるPF研究会でサイエンスケースの検討を進めてきました。KEK-PIP2022でもKEKとして別枠で進めるべき課題であると位置付けられ、それをベースとして、一昨年に日本学術会議が募集した「学術の中長期研究戦略」に、マルチビームをキーワードとし、新放射光源施設を含めた統合型量子ビーム科学の施設計画がKEK機構長から提案されたこと、昨年文科省「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想（ロードマップ2023）」にもKEK機構長から「研究分野を深化・融合・創成する放射光マルチビーム実験施設」が提案されたことは、新放射光源施設の実現に向けて非常に大きな一歩になりました。並行して概念設計をまとめたデザインレポートの第一弾（PF-HLS CDR ver.1）をまとめて公開しました（<https://www2.kek.jp/imss/pf/pf-hls/library/>）。今後、毎年度2回更新を目標に検討内容の充実化を図り、最終的な設計提案書を完成させたいと考えています。今年度後半には新放射光源施設に関するPF研究会の開催を予定しており、ユーザーや放射光コミュニティとのさらなるサイエンス検討や新施設に関する情報共有を図り、この概念設計に反映させたいと考えていますので、ユーザーの皆様方の積極的なご参加をどうぞよろしくお願いいたします。また、設計や計画の充実化を図ることはもちろんですが、国内の他の放射光施設の整備計画やKEKの他の分野の大型計画との調整も非常に重要です。PFは、大学共同利用機関である物構研の中核施設として科学研究と人材育成の拠点となること、また、世界有数の加速器の専門家組織を有するKEKに所属する強みを活かした開発研究の拠点となることが期待されていると思います。日本学術会議「第24期学術の大型研究計画に関するマスタープラン（マスタープラン2020）」で日本放射光学会から提案して重点大型研究

計画に選定された「放射光学術基盤ネットワーク」でも学術施設の役割の重要性と施設高度化の必要性が述べられていましたが、学術施設の計画を具体化していく上では、学術研究や大学共同利用の説明強化、学術施設間の役割分担の明確化が必須であると考えています。そのためにはまず、PFならではの取り組みやPFの強みを活かした役割をしっかりと説明することが重要だと思います。今後、施設内外の関係者と強く連携して、学術施設やPFの果たすべき役割を明確化し、学術施設だけでなく放射光コミュニティ全体で議論して広く理解を求めていきたいと考えています。非常に難しい課題だとは思いますが、ユーザーの皆さまと一体となり、この課題に当たりたいと思います。皆さまのご理解とご協力、そして応援を何卒よろしくお願い申し上げます。

先日、4年ぶりにPFで花見を開催しました。晴天のもと満開の桜を見ながらスタッフの皆さんと話をし、普段聞けないようなことを話せて非常に有意義でした。コロナ禍が始まってリモート会議が当たり前になり、ある部分は効率化が図れたと思いますが、一方通行的な報告となりがちで、意見交換をしたくてもなかなか議論にならないことが多かったと感じています。最近少しずつ対面での会議も増えてきて、そうなると同様に多発的に議論が発生し、大小さまざま議論が実質的に進むことが多く、やはり意見を戦わせて物事を進めるためには対面での会議が必要だと実感しました。本稿でも連携、連携と書きましたが、強く連携するためには顔を突き合わせての議論が大事だと思います。特に難しい案件の議論では尚更だと思います。今後ユーザーの皆さんとも対面の会議の機会をなるべく設け、言いづらいうようなことでも腹を割って話せるようにすることで、よりよい施設運営や高度化、次期計画に反映できるようにしたいと思っていますので、皆さま、「放射光実験施設との連携」をどうぞよろしくお願いいたします。

この4月から高橋前会長の後を引き継がせていただきました慶應義塾大学の近藤と申します。至らない者ですが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



ご挨拶の機会をいただきましたので、初めに、簡単に自己紹介をさせていただきます。私の専門は表面科学、触媒科学で、主に軟X線を使ったオペランド計測をBL-13でさせていただいております。PF実験ホールに入っすぐのところにビームラインで実験させていただいていますので、お見掛けくださった方もいらっしゃるのではないかと思います。PFとの関わりは学部の卒業研究以来になりますので、もう35年以上になります。卒業研究以来、ずっとPFに育んでいただいて、その結果として、今日の自分があると思っています。その意味で、どのような形であれ、PFのためにできることがあればやらせていただきたいと思いますのでございまして、そのことが、今回、微力ではありますがPF-UAの会長をお引き受けさせていただいた理由の一つになります。

さて、PF-UAは、ご承知のように、放射光実験施設Photon FactoryのUser Associationで、その活動の目的は、基本的にはユーザーがより良い経験を得られるよう支援して、関連するPhoton Scienceや放射光技術の発展に貢献することにあると思います。特に、Photon Factoryにあっては、放射光実験施設ですから、より良い放射光実験ができるように支援するのが第1目標だと思います。そしてもう一つ大事なことは、PFは大学共同利用機関が運営する施設ですので、そこは本来、学びの場でもあることです。PF-UAは、ユーザーがより良い学びができるよう支援するのがもう一つの目標かと思っています。また、PFあつてのUAですから、放射光施設としてのPFの発展をユーザーサイドからできる限りのサポートをすることもUAの大事なミッションだと思います。

これらのことを頭に置きながら、次の3年間でどのようなことを大事にしながらUAの活動を進めるかについて述べさせていただきます。一つ目は、高橋前会長が施設や幹事の皆様方と一緒に進めてこられた新しい活動をしっかり継承していくことです。マルチビーム利用を想定したPF研究会や、PF-UA学生論文賞、PF-UAサマースクールなどこの3年で始めたPF-UAの活動をきちんと継続していきたいと思っています。二つ目はユーザーが施設を利用する環境をよりよくし、施設を利用するメリットを高めることです。これまで、施設のご尽力で利用環境は格段によくなりました大変感謝しているところですが、さらにユーザー間の相互交流を通してユーザーがPFにコミットす

る価値を高められればと思っています。その鍵の一つはユーザーグループの活動にあると思っております。コロナのためにユーザーグループの活動がだいぶ抑制的にならざるを得ない時期を過ごして参りましたが、その時期を終えて、これからユーザーグループの新たな活動を後押ししていきたいと思っています。三つ目はPFの大学へのアピールです。施設自身も努力をされていますが、その施設を使わせていただいている私たちユーザーがハッピーであることが大学に伝わるのが、新たなユーザーを増やし、様々なコラボレーションの機会を増やし、ユーザーコミュニティを活性化するのにつながると考えています。そのためにPF-UAがもつ器、例えばホームページやUAが主催する様々な行事を通して、大学へのアピールに用いることができると考えています。それによって、大学コミュニティとのより強い繋がりを築いていくことを目指せればと思っています。

以上、簡単ですがこれからの3年間に大事に進めたいことを書かせていただきましたが、どれもこれも、ユーザーと施設の皆様のご協力が不可欠です。私たちユーザーはPhoton Factoryという船に乗った乗組員と見ることもできます。お客として乗っているのではなく、施設の皆様と協力していろいろ努力することで、乗り心地を格段に良くしたり、船がより速くより遠くまで航海することを可能にすることができるかもしれません。そのような方向を目指して、ご一緒にこれからの3年間を歩んで参りたいと思います。皆様のご協力を心からお願いする次第です。何卒、宜しくお願い申し上げます。